

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04088

研究課題名(和文) 子ども時代の自己決定体験が生涯の関係形成に及ぼす影響 - 3世代にわたる縦断研究から

研究課題名(英文) How childhood experiences with self-determination influence the formation of interpersonal relationships over the course of a lifetime : A study spanning three generations.

研究代表者

藤崎 真知代 (FUJISAKI, Machiyo)

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：90156852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：生涯的縦断研究に運命的に協力者となった第2世代協力者は、ノンプログラムの自己決定を重視する子どもキャンプでの研究スタッフとの共同生活体験を通して、思春期には主体的協力者となっていた。その後、青年期での研究スタッフとの触れ合いを経て、成人期に至り、価値観や生き方、親となつての子育てや次世代の育成の在り方等について子ども時代の自己決定体験の意味を共に繰り返し吟味してきた。その過程を通して、研究協力者・研究スタッフという関係から、対等な対話する関係へと展開してきた。そうした自己決定体験の生涯的発達における意味を10事例の質的分析を通して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The second-generation participants of this lifelong longitudinal study were pre-determined from birth. These participants, through their experiences living together with staff members in non-program camp which was emphasized cultivating self-determination for the children, became active participants of the study at puberty. During adulthood, the second-generation participants' value systems, lifestyles, and beliefs about how to nurture the following generation were scrutinized with reference to their experiences in self-determination making and to their connection with the staff at camp when they were children. Through that process, the relationship between researchers and research participants progressed to an equal and interactive one. The meaning of this experience of self-determination making was clarified through a qualitative analysis of 10 cases within this study.

研究分野：発達心理学

キーワード：生涯的縦断研究 質的分析 ナラティブ 自伝的記述 自己決定体験 育つ・育てられる・育てる

### 1. 研究開始当初の背景

子ども時代をいかに過ごすかは、生涯にわたる発達の基礎として重要であるにもかかわらず、現在、我が国は子どもの自己決定体験が極めて少ない危機的状況にある。

古澤と我々は、1965年と1976年に出生前母親面接を行い研究に着手して以来、40～50余年の2つのコホートによる生涯的縦断研究を行ってきた。

2009年度～2011年度には、基盤研究(C)「40年にわたる生涯的縦断研究における研究者・協力者関係 - 両者の体験の質的分析」において、親世代・子ども世代協力者と研究者が、自己決定を重視する触れ合い(母親グループ・子どもキャンプ: Human Relationships Laboratory、HRLと呼ぶ)のなかでの体験を、それぞれの人生にどのように意味づけているか、質的分析を通して明らかにした。

学術的背景は、次の通りである。人は生まれた瞬間から大人との「やりとり」による相乗的相互作用(Sameroff, 1977)により、また生態的システムの中で今を生きている(Bronfenbrenner, 1978; 1994)。このような一人の人が発達する過程を包括的に捉えるには、客観的資料によるアプローチでは限界がある。Brunerは、各人の人生の意味づけをナラティブに捉えることの重要性を『意味の復権』(1990/1999)の中で論じている。

第2世代協力者は、子ども時代には、生育家族における日常生活のなかで形成される関係のほかに、自己決定体験を重視する非日常的な体験を合わせもった(平井、1980)。その後子どもの自己決定体験を尊重し、それを支えた研究者との継続的な関わりのなかで、対等な対話的関係を介して、第2世代協力者には対話的自己(Herman & Kempen, 1993/2006)が形成されつつある。この過程には、野村(1990)のいうところの、B系列の物理的時間のみならず、A系列の心理的時

間、E系列の対話的時間を内包しているといえよう。つまり、「生涯的縦断研究の一つの方法は、研究協力者を研究対象として第三者的に捉えるのではなく、研究者と研究協力者とが対等な対話的関係を形成していくことを基盤とするのか？」が、本研究の核心をなす学術的問いである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。

- (1) 生涯的縦断研究第2世代協力者が幼児期から継続して参加してきた毎夏の子どものキャンプにおける自己決定体験が、自分自身の生き方、子育て、次世代育成のあり方に反映されている様相を検討することである。
- (2) 子どもキャンプでの第2世代協力者とスタッフとの共同生活体験が、成人後の両者の他者へ開かれた対話する関係を形成する過程を明らかにすることである。
- (3) 新たな意味を生成する創造活動としての生涯発達過程を明らかにするための質的アプローチを構築することである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究手続き

生涯的縦断研究の第1世代(母親世代協力者)、第2世代(子ども世代協力者及びその配偶者)、第3世代(子ども世代協力者の自分の子どもや自子以外の次世代)に、個別ナラティブ面接、2世代間合同ナラティブ面接を実施し、主に質的分析を行うこととした。

また、子どもキャンプの現地を、研究協力者、その家族、スタッフが共に毎年訪問し、対話の場とした。さらに、海外在住の第2世代協力者3名を訪ね(中国、米国、ドイツ)、生活の場で家族と交流し、協力者及び夫婦のナラティブ面接を実施した。

#### (2) 分析手続き

事例の分析に当たっては、生涯的縦断研究の過程で収集してきた資料も加えて検討し

た。分析手続きは次の通りである。これら全ての手続きを研究者3名の合議により行った。

各録音記録から逐語記録を作成した。

逐語記録・手記から第2世代協力者の生涯発達における転機となるエピソードを時間軸に即して抽出した。

各エピソードの意味を検討した。

### (3) 倫理的配慮

ナラティブ面接実施前に、協力意志を確認し、承諾書を交わした。研究成果の公表に当たっては、公表内容について協力者に確認し、匿名扱い等の取扱い上の配慮を行った。

## 4. 研究成果

8回におよぶ学会発表で、生涯的縦断研究の枠組の再検討、本縦断研究の発達研究における独自性を明確にした上で、10事例を取り上げ、子ども時代の自己決定体験の意味づけの共通性に基づいて、3グループに分類した。以下、グループ毎に事例の特徴を述べていく。

### 1) 自己決定体験が職業選択と生き方に反映しているグループ

第1コホート男性3名、女性1名、第2コホート女性1名が該当する。

#### 事例1：Aさん(第1コホート、男性、52歳)

子どもキャンプでは、活発に活動し、特に虫採りに夢中になり、採集するだけでなく、残酷にも扱っていた。こうした経験を振り返り、40代では、「子どもの頃に虫を採集しては殺していたことの罪滅ぼしで獣医になったのではないかと…」と語っていた。

現在、地域の夜間の救急診療体制を構築し、動物の命を守る獣医として活躍している。毎夏の旧子どもキャンプ地訪問には、妻と2人で参加し、参加者全員がゆったりとした時間を過ごせるようにキャンプ道具一式を用意し設営している。その配慮は、かつて子どもたちの自己実現を支えたスタッフの姿と重なるところがある。

#### 事例2：Bさん(第1コホート、男性、52歳)

子どもキャンプでは、自然の中で自分のし

たいことを実現し、活発に活動していた。こうした経験を振り返り、「人生において迷ったときには、子どもキャンプにいた自分に身を重ねて判断してきたことに間違いはなかった」と語っていた。

現在、職場の若い世代を対象とした社内研修などでは、スタッフ同じように、相手の話を丁寧に聴く受容的話し合いを行っている。また、野外遊びとしてのキャンプ・スキルは災害時の「生きる力」となるとの信念から、「防災キャンプ」を行う活動に、力を注いでいる。

#### 事例3：Cさん(第1コホート、女性、52歳)

幼児期から大学卒業まで本縦断研究の全ての企画に参加してきた。中学では吹奏楽部に所属し、後に音大に進学した。現在は、個人レッスンと複数の中学校で外部指導員として吹奏楽部を指導し、“次世代を育てる”役割を果たしている。

Cさんは、子どもキャンプでは活発に動き回るのではなく、周囲をよく見ている子どもであった。また、思春期以降、キャンプの仲間同士で密度の濃い話し合いを重ねたことを通して、思春期前後の様々な個性をもった子ども達の感じ方、考え方、行動などを学び取った。現在のCさんの生徒達への接し方は、多様な個性に寄り添って大人の考えを押し付けないなど、スタッフの子ども達への接し方と重なる。現在の部活指導には、子ども時代に大人に支えられた安心感の中で自己決定体験を積み重ねた子どもキャンプでの経験が、大いに活きているといえよう。

#### 事例4：Dさん(第2コホート、女性、39歳)

子どもキャンプに小3から、中3まで参加。リベラルな校風の私立女子中高一貫校へ進学。自立心や平和主義の信条が育つが、大学では、多様な考え方もつ人々や男性主導の厳しい現実社会に衝撃を受ける。自由度の高いバックパック海外一人旅。就職後、父親の介護、子育てに多忙で、かつ充実した職業生活を送る。

2016年には、第2世代協力者とスタッフとの合同ミーティングに第2子連れて参加した。また2017年には家族4人全員で旧子どもキャンプ地訪問に参加した。強制されない子どもキャンプと中高のリベラルな校風が生き方の核となっている。様々な出来事の中で、葛藤しつつ現実と向き合い、家族の関係性を組みかえていくしなやかな生き方が読み取れる。

#### 事例5：Eさん(第1コホート、男性、52歳)

父親の転職のために中・高時代は、参加できなかったが、大学生になって再び、活動に参加するようになった。家庭と学校の厳しいしつけの中、「子どもキャンプは“別天地”であった」と日常生活とは異なる自己決定体験を語り、「職場では話題とならない人生や人との関係についてここでは話せることに意味を感じている」とも語っている。

現在は、他界したスタッフの遺児(30代)と家が近く、交流が続いている。

#### 2) 子どもキャンプのスタッフ体験が生き方に反映しているグループ

第2コホートの子どもキャンプにスタッフとして参加した第1コホートの男女各1名である。

#### 事例6：Fさん(第1コホート、男性、52歳)

子どもキャンプでは、他児とは関わらず、スタッフとは独自の関わり方、例えば、スタッフを強く噛むといった行動が見られたが、スタッフにありのままを受け止められていた。大学生になり、第2コホートの子どもキャンプにスタッフとして参加した。

スタッフを噛んでいた行動の意味や、自分がスタッフに受け止められようには子どもを受け止められなかったことに気づくなど省察を深め、それを語り始めている。成人してからも、子どもキャンプ地には、毎夏一人でも自転車で訪ね続けている。彼にとって子どもキャンプの地は、特別の意味、すなわち自分を見つめ直す場、今を生きて

いることを確認する場となっているのである。

#### 事例7：Gさん(第1コホート、女性、52歳)

幼少期は多動で育てるのが難しい子どもであったという。公立小学校入学後間もなく、クラスに馴染めず、私立小へ転校し、高校まで進む。小・中学時代は子どもキャンプに参加し、思うまま自由に過ごす姿があった。大学は声楽科に進学し、卒業後就職、結婚後退職。現在は高校生と大学生の2人の息子がいる。最近は、スタッフとの合同ミーティングに参加している。

子ども時代のGさんを囲む家庭・学校・音楽教室などは、Gさんの個性を受けとめて育ててくれたといえよう。子どもキャンプもまた、Gさんの自己決定を尊重し、Gさんらしく過ごせる場として彼女を受け入れた。長じて第2コホートの子どもキャンプにスタッフとして参加し、子どもたちを育てる役割を担ったが、自身が育つ場ともなっていたと振り返っている。また、子育ての中で母親として多様な人々や書物に出会うことができた。子どもたちを取り巻く環境からも、育てられ、育っている。Gさんは現在、生来の伸びやかさに加え、周囲への配慮のある女性となっている。

#### 3) 自己決定体験が海外で生活する生き方に反映しているグループ

海外で生き、子育てをしている第2コホートの女性3名が該当する。

#### 事例8：Hさん(第2コホート、女性、41歳)

小学校でネガティブな友人関係を経験したが、同時期に子どもキャンプではありのままの自分を受け入れられ、自己決定を待ってもらえる体験ができた。私立中高一貫校で充実した中・高生時代を過ごした。大学在学中に、留学生と知り合い、卒業後、仕事に就き、長い交際を経て結婚。ドイツに転居し、2児を出産。日本人アイデンティティを強く持つが故に、ドイツ文化の

中での子育ての難しさを抱えている。

事例 9: I さん(第 2 コホート、女性、41 歳)

高校 2 年時に一家で渡米。家族が帰国後も、I さんは一人米国に残り、大学・大学院に進み、日本人留学生と結婚。専門職に就き、一児の母親となった。子どもキャンプには 5 歳時から参加し、現在でもキャンプ仲間とメールや訪問などの交流がある。

子どもキャンプへの参加を含め両親の教育方針のもと、高校時点での渡米が I さんの転機であった。多様な文化背景をもつ人々と出会い、世の中に「完璧な文化はない」との見識をもち、日本と米国、両文化のよいところも悪いところも客観的に吟味している。現在の自分は日本人と C 州人が半々であり、縦断研究との出会いは、誕生前に親が決めたのであるが、研究対象であることも自分の一部と位置づけている。

事例 10: J さん(第 2 コホート、女性、39 歳)

私立小学校から大学までの一貫校へ進学し、子どもキャンプとも共通する自己選択・自己決定を重んじる家庭環境の中で、高校 1 年でのニュージーランド留学を始めとして、豊富な海外での学生生活を経験した。

5 歳から子どもキャンプに参加。大学卒業後、就職、結婚。夫が中国で仕事を始めるのを機に、退職し中国へ。3 児を里帰り出産し、10 年余り中国で子育てをしている。

両親ともに J さんの学生生活、就職、結婚、子育てには干渉せず、見守り、支えている。J さんは、中国での子育ては、いろいろな見方や考え方があるなかで、自己選択・自己決定を迫られる状況をたくましく生きている。

全体的考察

現在も相互に連絡を取り合っている研究協力者と研究スタッフ 65 名の居住地は国内外に広がっている。

まず、両コホートの第 2 世代協力者とスタッフとは、自己決定を大切にした毎夏の

子どもキャンプを通して共感的信頼関係が結ばれた。次に、第 1 コホートの第 2 世代協力者が、スタッフとして第 2 コホートの子どもキャンプに参加することによって、2 つのコホートの交流が始まった。成人した後も、第 2 世代協力者とスタッフとの合同ミーティングを重ねていくことにより、共感的信頼関係は対等な対話的關係となった。この関係は、野村(1990)のいう E 系列の時間である響き合う「対等な対話的關係」と考えられよう。

1965 年以降の社会的動向のなかで、スタッフは第 2 世代協力者の子ども時代の自己決定体験を支えるため、それまでに身につけてきた目にみえない常識や価値観を見直してきた。そして、第 2 世代協力者もスタッフも、それぞれ育ち・育てられ、さらに次世代を育てつつ、今日まで生きてきている。

子どもキャンプにおける自己決定に関する第 2 世代協力者とスタッフの体験は、一人ひとりの生の全体性と深く結びつきながら、両者は共に恭敬し、多声・多重的な意味をもって、相互に受け入れあう関係性を構築してきている。それは「われわれの対話的時間をなす関係」であり、「意味の時間」であり、「われわれ - われ(私たち)の時間」ともいえよう。

このように、第 2 世代協力者とスタッフが生涯的に語り相互に積み重ねてきたからこそ、第 2 世代の子ども時代の自己決定体験の意味を、「自己の生の歩み」や「転機」として事例のライフストーリーに示し得たと考える。創造活動としての生涯発達過程は、質的アプローチによる生涯的縦断研究でこそ、捉えられることを明らかにできたといえよう。

5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 8 件)

日本発達心理学会第 27 回大会(2016 年 4 月 29 日~5 月 1 日、北海道大学)

生涯的縦断研究における研究者・協力者関係の質的分析その12: 3世代にわたる関係性の影響へのアプローチ 藤崎真知代・杉本真理子・石井富美子

生涯的縦断研究における研究者・協力者関係の質的分析その13: 第1世代・第2世代それぞれの語りにみられる関係性の発達的变化 杉本真理子・藤崎真知代・石井富美子

日本発達心理学会第28回大会(2017年3月25日~3月27日、広島大学)

40-50年にわたる親・子ども・研究スタッフとの関係の創生(1)子ども時代の自己決定体験はどう語られたか: 研究の枠組と研究方法 石井富美子・藤崎真知代・杉本真理子

40-50年にわたる親・子ども・研究スタッフとの関係の創生(2)子ども時代の自己決定体験はどう語られたか - その1 - 杉本真理子・藤崎真知代・石井富美子

40-50年にわたる親・子ども・研究スタッフとの関係の創生(3)子ども時代の自己決定体験はどう語られたか - その2 - 藤崎真知代・杉本真理子・石井富美子

日本発達心理学会第29回大会(2018年3月23日~3月25日、東北大学)

40-50年にわたる親・子ども・研究スタッフとの関係の創生(4)子ども時代の自己決定体験はどう語られたか - その3 - 石井富美子・藤崎真知代・杉本真理子

40-50年にわたる親・子ども・研究スタッフとの関係の創生(5)子ども時代の自己決定体験はどう語られたか - その4 - 杉本真理子・藤崎真知代・石井富美子

40-50年にわたる親・子ども・研究スタッフとの関係の創生(6)子ども時代の自己決定体験の語りとその後の人生行路 藤崎真知代・杉本真理子・石井富美子

[その他]

報告書(計2件)

藤崎真知代・杉本真理子・石井富美子(編著) HRL2014年度から2017年度1月までの活動報告書 2018年1月 総頁100頁

藤崎真知代・杉本真理子・石井富美子編

HRL(Human Relationships

Laboratory)古澤頼雄先生・守永英子先

生・野田幸江先生 著作集 2018年2月

総頁68頁

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

藤崎真知代(FUJISAKI, Machiyo)

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号: 90156852

### (2)研究分担者

杉本真理子(SUGIMOTO, Mariko)

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号: 70130010

石井富美子(ISHII, Tomiko)

立正大学・社会福祉学部・名誉教授

研究者番号: 00060682